

おつかい

昭和五四年度 四年女児

わたしは、いつも家に帰るとひまでひまでたまらない。

それで、ひまな日は、家に帰ると、すぐお母さんに、

「今日、買い物ある。」と聞く。すると、だいたいは、お母さんが、

「あるよ。」という。その日も、お母さんは、

「あるよ。」と言ったので、わたしが、

「おつかいに行ってくる。」

と言うと、

「だいこん一本買って来てちょうだい。」とお母さんが言った。わたしは、うれしくなって、

「じゃあ、お金ちょうだい。」とうきうきして言った。お母

さんは、さいふを持ってきて、わたしの手に百円玉を

「はい。」と言ったのせた。

わたしは、百円玉を見て、これだけでだいこん一本買えるのかなあと思いつながら、

「百円だけでだいこん一本買えるの。」と不思議そうに聞いてみた。するとお母さんは、

「だいじょうぶ。ちゃんと買えるよ。」と自信のある顔つきで言った。でも、まだわたしは、うたがわしそうな顔をして見ていた。だけど、そのうちにお母さんが言っているのだから、本当かもなと思って、初めのうきうきしていた気持ちにもどって、さいふにお金を入れて、買い物ぶくろに入れると、元気よく、

「いってきまあす。」というのと、近くの八百屋へとかけだした。

はあはあと息をはずませて、いっしょうけんめい走った。少し行くと、自動車が走って来たので、わたしは、あわてて止まり、自動車が通りすぎるのをたしかめて、また走り出した。いままでよりも、もっと速く走ったので、あっという間に八百屋についてしまった。

その八百屋は小さくて、お客さんの立つすきは、ちょっとしかなく、やさいだけで店がいっぱいだった。

わたしが八百屋についたときは、お客さんは、一人しかいなかったのので、わたしは、店に入るとすぐに、店の人が、「何買う。」と聞いたので、わたしは、お母さんからたのまれたものを思いだして、

「だいこん一本下さい。」と低い声で言った。それは、百円

でだいこん一本買えるのかなという気持ちと走って来たばかりなので、まだ息がはあはあしていたためだった。

お店の人が、

「だいこん大きいのがなくて、小さいのしかねな。」と言いながら、すみっこにあるだいこんを取って、新聞紙に包んだ。それから、わたしにだいこんをわたして、

「一本四十円。」と言った。そのとき、わたしは、お母さんの言ったとおりに、百円だけでだいこん一本買って、とてもうれしかった。わたしは、お店の人にだまって百円わたしと、お店の人は、

「おつり、六十円の。」と言って、わたしに六十円をわたした。

わたしは、お金をさいふにしまって、さいふとだいこんを買い物ぶくろにしまうと、来るときよりもゆっくり歩いて帰った。家につくと、わたしは、

「ただいまあ。」と言って部屋に入ってみると、お母さんは、こたつに入ってテレビを見ながら、

「買って来てくれた。」とわたしに言った。わたしは、

「はい。」と言って、お母さんにだいこん一本と、おつり六十円をわたした。お母さんは、おつりの六十円をみながら、

「はい。この十円いつもおつかいしてくるから。」といって、わたしに十円をわたした。わたしは、

「どうもありがとう。」とお礼を言うと、すぐに、子ども部屋に飛んで行って、貯金箱に十円玉をしまった。そのとき、わたしは、とてもうれしかったので、いつも、おつかいをしていてよかったと心の底から思った。そして、これからも、おつかいを続けようと思った。